

## パネル・ディスカッション 1

### 「海外から見た日本文化とアーティスト・イン・レジデンス事業」

#### ◇パネリスト

エマニュエル・ワンバック（陶芸家・アーティスト／アメリカ）

クリスチャン・メルリオ（ヴィラ九条山館長／フランス）

若杉聖子（陶芸家、フランスのリモージュの AIR を経験／兵庫県）

#### ◇モデレーター

安藤祐輝（陶芸の森創作研修課 レジデンス事業担当指導員）

安藤●テーマは「海外から見た日本文化とアーティスト・イン・レジデンス」ですが、課題を整理して一つずつ考えたいと思います。そこで、まず私からみなさんに二つ、三つ質問したいと思います。

まず、海外から日本文化はどう見えているかです。ワンバックさんはアメリカ、メルリオさんはフランスの出身で、日本にくるまえは日本をどう考えていたかは、先ほどのご発言にもありました。では、日本に来たことで日本の印象が変わった点があれば教えていただけますか。

ワンバック●日本については、授業やテレビ・映画を通じて知っていました。日本はアメリカよりも芸術を大事にする国、文化におけるアートの占める位置がとても高いことは知っていました。特に、陶芸の存在感が大きい国だと。そのことは、私が陶芸の森で受けたサポートの大きさを考えても強く実感します。こうした AIR をアメリカでしたとき、周囲からの同じようなサポートを得られるかといえば、それはむしろかしいと思います。

メルリオ●ヴィラ九条山の館長としてお話をさせていただきますと、日本の文化や芸術の影響はヨーロッパ、とくにフランスにおいてとても大きいものがございます。30年くらい、こういう大きな影響がつづいていると思います。

フランスの状況を考えて一つ申し上げるとすれば、アカデミックな側面から見られることの多いいわゆるファイン・アート（fine art）と、その応用であるアプライド・アート（applied art）の区分の仕方が違うのではないかと感じています。ヨーロッパは、この二つを区別して見る傾向が強いのですが、日本はそのあいだを行ったり来たりしている気がする。その意味でも影響は大きいと感じてきました。

アートの環境をみても、フランスの考え方とは異なる点があって興味深いと思っています。今回、日本での取り組みをとおして、とてもおもしろい経験ができました。その意味で、フランスのアーティストは、日本からとても大きな影響を受けていると思います。例えば、いわゆる現代アートとファイン・アートとのあいだを行ったり来たりするような経験をすることができます。なにかをつくと、それがオブジェクトであり、同時にそれはアート・ピースにもなりえるのです。こういうことは過去のフランスにもあったと思いますが、戻りたいと思ってもすぐに戻れることではないのです。

例えば、なにかを美術作品として展示されていても、それは同時に役にたつものであるという状況です。フランスでは、なにかの役に立つものであれば、たいていはアート・ピースとはみなされません。もちろん、アート・ピースというのはある意味で役に立つものですが、それは人の心のなかにおいて役にたつという捉え方です。これは小さなちがいの

ように感じられるかもしれませんが、実はここからとても大きな違いが生まれます。その意味で、日本の文化やアートからとても大きな影響を受けているのです。

そのような経験から海外のアーティスト、とくにヨーロッパやフランスのアーティストは影響を受けていると思います。もう一つの言い方をすると、日本の芸術あるいはアートは、いろいろな意味でつながっているといえるのです。これもフランスの芸術の考え方とはまったく違います。フランスはどちらかというと、それぞれのアートのフィールドが分かれて独立しています。しかし、日本ではそれがリンクしている、つながっていることが多いのではないかと考えています。

このような状況で、例えばなにかをコピーしたとしても、日本ではそんなコピーは無意味だということになります。たとえば茶碗というオブジェクトがあるとして、それをコピーしたとしても、それは茶碗でしかありません。しかし、日本のアートの考え方では、その茶碗は茶道とつながり、建築とつながり、その空間とつながっている。そのすべてが一体となってアートとなっている。このことを理解しないで、茶碗というオブジェクトだけをコピーするのは、背後にある文化をまったく理解していないことになります。小さな茶碗でありながら、その背後には大きなものが存在している。こういう点を、西洋のアーティストやフランスのアーティストはもっと知りたいと感じていると思います。

安藤●おもしろい意見をありがとうございました。ただ、この問題はとてもむずかしい工芸論になります。今日はテーマが違うので、このあたりにさせていただきます。(笑)

若杉さんは、逆に日本からフランスに行かれたのですが、そうすることで日本文化についての考え方に変化はありましたか。

若杉●いまメルリオさんがおっしゃったことを強く感じました。行ったり来たりできるのが日本人特有の感性で、よいことだと思いました。一方で、日本を出て欧米で作品を展示するとき、日本のやり方がそのまま通用するのかなと……。日本のことを知っているアーティストにはわかっても、それはとてもニッチで隙間的なアートではないかと思います。これから海外に出て行くなら、このままではいけないのではないかと感じました。

安藤●次に、日本の AIR についてですが、ワンバックさんは日本はアートを大事にする国だと指摘されました。ずっと日本にいる私は、アメリカやフランスのほうがアートは盛んな印象です。アメリカのアートの周辺や AIR の環境などについて教えてくださいませんか。

ワンバック●私は、アメリカで AIR の経験はないのですが、アメリカにも当然 AIR はあります。信楽のような環境があり、そこでは陶芸をサポートしてもらえます。しかし、一般のアメリカの人たちは陶芸にあまり興味はない。大事に思ってくださいらない。アートの存在感がだんだん軽くなって、学校の授業からも減らされている。そういう流れですから、陶芸についての知識もほとんどない状態です。私は、そういう環境だからこそ、AIR の重要性が際立つと思うのです。アートの授業がどんどん減らされ、人びとがアートの歴史や役割などを知らなくなっている。そういう中で、AIR は芸術を一般の人たちに知らしめる役割を果たせると考えています。

そのような状況にあるアメリカでは、たくさんの議論が行なわれ、博物館では展示する陶芸作品を増やすなどしています。それでも私は、一般の人たちの理解に満足していません。ただ、アーチブレイのような施設が活発に活動しているのも事実です。

安藤●では、これからの AIR にどのような期待をしているのかをお聞きします。ワンバックさんからどうぞ。

ワンバック●陶芸の森での AIR がほんとうにすばらしいので、自国でもこのような経験がもっとできればと思います。より多くの AIR の機会、施設があればと思います。それは国際的にも増えなければいけないと思います。

メルリオ●ヴィラ九条山は 25 年ほどの歴史ですが、日仏の対話の歴史を考えると、1 世紀ほどの歴史があります。そういう歴史のなかで、とくに 20 世紀において日本のアートは西洋のアートにたいへん大きな影響を与えてきました。この AIR プログラムも、新しいアーティストにたくさんの経験を積む機会をぜひ与えてほしいと願っています。日本にきて、日本のアーティストと交流してもらい、新しい知識をフランスにもって帰ってもらうということです。その知識というのは、イメージだけではありません。経験をもつて帰るということです。そういう仕組みが、AIR のプログラムでできるのではないかと考えています。さまざまな制作活動に携わった経験をもつて帰ってもらいたいと考えています。

若杉●ヴィラ九条山のように、国際的なコラボレーションができるプログラムがほしいですね。日本とだけではなく、世界とコラボレーションできる仕組みがあれば、さらに多くの経験も積めると思います。

安藤●最後に、みなさんのお話を聞いて考えたことをお話しします。まず、AIR で日本に行くこと、滞在することは、大陸の人たちにはかなり気合が必要なことだと思います。離れ小島のような国に行くことになるからです。でも、離れ小島だからこそ独自の文化が発達したという事実もある。平安時代の国風文化から始まって、新しいところだとガラパゴス携帯もその代表的なものです。デジタル製品やアニメーション、陶芸もその一部だと思います。とはいえ、そのような感覚は、人間が長い年月を経て忘れかけているだけで、世界の人すべてが共通にもっている感覚だと思います。

かつて陶芸の森に滞在した海外の人が、「日本人は、わび・さびをどこに置いてきたんだ」と言ったという話を聞いたことがあります。人間はアフリカから広がったという話がありますが、逆に日本人が忘れてしまった大陸の感覚もすくなくならずあると思います。

話はやっと AIR につながるのですが、AIR は自分が忘れてしまった感覚を取り戻す補完作業でもあるかなと考えたりもします。国や地域の差の出やすいもの、人体表現などを媒介にして理解しあったり、つながったりすることで、自分が忘れていた感覚を取り戻すことを求めているのかもしれないなどと考えつつ、今回のディスカッションに臨みました。

ありがとうございました。